

まえじま

たいら

前島 平

茨城の電気王 水戸市・常陸太田市



(常陸太田市提供)

慶応元年(1865) - 昭和8年(1933)。茨城郡渋井村〔水戸市〕出身。水戸藩士井坂家の二男に生まれるが、15歳で久慈郡太田町〔常陸太田市〕亀宗呉服店に奉公、20歳で亀宗本家、前島家の養子となる。その後太田銀行取締役、町会議員、郵便局長等を兼任。明治37年(1904)シーメンス社外交員の話から電気に関心を持ち、久慈郡中里村〔日立市〕に水力発電所建設を計画。同39年(1906)茨城電気株式会社を設立。発電所は送電前に日立鉾山に買い取られるが、その資金で同40年(1907)水戸市に火力発電所を建設し8月10日、茨城県で初めて水戸市に電灯が灯った。大正10年(1921)、茨城電気を茨城電力株式会社に改め、同14年(1925)合併により東部電力株式会社設立後は、副社長となり東京に移る。電気事業の発展に生涯を捧げる。

「エレキ<電灯>がついた。まるで昼間のように明るいぞ！」

明治40年(1907)8月10日、水戸市に茨城県で初めて電灯が灯りました。ランプやあんどんの明かりをたよりにしていた生活はしだいに電灯の生活へと変わっていきませんが、この電灯を灯すための電気を県全域に広めることに力を尽くしたのが、前島平です。

平は、元の姓を井坂といい、茨城郡渋井村〔水戸市〕に五人兄弟の二男として生まれました。父は水戸藩の武士でしたが、家族が多く暮らしが苦しかったので、15歳で水戸を離れ、太田町〔常陸太田市〕の亀宗呉服店に働きに出されました。

(どうしてぼくだけが働きに出されなければならないのだろう。)

平はそう思いましたが、家の苦しい生活を考え、少しでも家族の手助けになればと一生懸命に働きました。

この平の姿を見ていたのが、本家にあたる呉服店「亀半」の主人、前島半三郎でした。子どものなかった半三郎は、平をたいへん気に入って、養子にむかえました。平が20歳のときのことです。働き者の平が跡を継ぐと、亀半はますます繁盛しました。人々の信頼も厚く、町会議員や郵便局長なども務めました。

平が電気事業に乗り出すきっかけは、明治37年(1904)、40歳のときに訪れました。シーメンス社という会社の外交員が、発電機を売り込むために太田町に来て、電気の話をしたのです。

東京の日本橋では、すでに明治20年(1887)に電灯が灯っていましたが、このときはまだ、茨城県内のどこにも電気というものはありません。

(これからの時代、電気は必ず必要になる。茨城



水戸の火力発電所 (『前島平』より転載)

の地にも早く電灯を灯さなければ。)

このように考えた平は、家業の呉服店や郵便局長の職をほかにゆずると、仲間とともに電気を起こす仕事を始めることにしました。

2年後の明治39年(1906)、平は太田町に茨城で初めての電気会社「茨城電気株式会社」をつくります。最初の仕事は、久慈郡中里村〔日立市〕に水力発電所を造ることで、建設が着々と進められていくさなか、日立鉱山の久原房之助(P.31参照)から水力発電所を買い取りたいという話が出されました。

(中里発電所はもうすぐ完成だが…。電気をより多くの人に使うためには、太田だけでなく水戸にも電気を送りたい。それならば、中里発電所を売って、そのお金を元手に、水戸に発電所を造ったらどうだろうか。)

こう考えた平は、日立鉱山の電力設備が充実したときには買い戻せることを条件に、中里発電所を売り渡しました。そして、明治40年(1907)、水戸市に新式の火力発電所を建設することに成功したのです。8月10日、水戸市内に灯った577灯の電灯は、一年後には1,001灯となり、その数は10,999灯に増えました。そして、日立鉱山から中里発電所を買い戻し、新しい発電所を造るなどして、電気の供給量を増やしていきました。また、社名を「茨城電力株式会社」と改めると、県内にあった電気会社をまとめ、大正11年(1922)には、実に83,000灯もの電灯を灯しました。

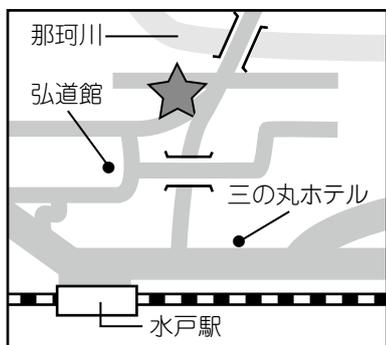
「茨城の地に電灯を灯す。」という決心を、前島平は見事にやりとげたのです。

ゆがりのスポットに行ってみよう

茨城県電気事業創業之地の碑

所在地 水戸市北見町3-81

内容 この記念碑は、明治40年(1907)8月10日に県内で初めて発電所から水戸市内に電気を供給したことを記念して、昭和32年(1957)に建てられました。



おもな 参考文献

『郷土史にかがやく人びと』(青少年育成茨城県民会議・1971)

『水戸の先達』(水戸市教育委員会・2000)